慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	反行動主義者も否、非政治理論家も否
Sub Title	Neither anti-behaviorist nor unpolitical theorist
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.10 (1970. 10) ,p.141- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	潮田江次先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19701015-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

反行動主義者も否、非政治理論家も否

奈良和重

一

政治理論の没落――思想もしくは哲学と言つてもよい――がいつ頃起つたのか？　その根源を求めたところで徒労な努力だろう。歴史的には遠くて深い。

しかしながら、「思想のラディカルな分解」(die radicale Zergliederung der Ideen) として[1]、デステュット・ド・トラシーの提唱したイデオロギーの科学が哲学者、政治哲学者、ひろく知識人にあたえた影響力は決定的なものであつた。ラインハルト・ベンディックスのいう「還元主義的分析」がそれである[2]。爾来、その「イデオロギー的科学の倨傲(ヒュブリス)[3]」はさまざまの教理問答――それを宗教と呼ぼうが、哲学あるいは社会科学と呼ぼうがドグマティズムにほかならない[4]――を生みだしてきた。このことは、宗教の失敗したところに、知識人たちが思想体系というものを携えて成功したからで、「彼らが哲学的研究をイデオロギー的便宜性に従属させたからであり、また、科学的方法と科学に鼓舞された自負心の助けを借りて、人間の条件

を変質させようと主張したからである」[5]とも言えよう。いずれにせよ、そのような結果が《人間の廃絶》[6]につながるかどうか、とすれば、近代の政治思想はまさにみずからの挫折と迷妄の小暗い影のなかを彷徨い歩いてきたことになるわけだが。この点で、ダンテ・ジェルミーノの見解は、「政治理論の復活」をめざしながら――そのためでもあろうか瞋恚の虜となつているところが無いとは言えぬ――《社会科学の実証主義化》[7]とイデオロギー的還元主義に激しい批判を加え、と同時に、その迫害の犠牲者たちに憐憫の情を寄せていて興味深い。

コントとマルクス――いずれ劣らず「神になつた人間」の新しいプロメテウス、彼の想像裡には、知識人の、知識人なるがゆえの支配欲（*libido dominandi*）がうずくまつている。「人類の最高なる司祭」たろうと確信したコントは、*l'esprit positif*をもつて倫理学的・形而上学的命題を排斥した。もしも彼の作品の豪華嬋妍たるシステムができあがつていたら、と思うと慄然とさえする。それは、人間にもはや思考することを許さず、それのみか人間と人間的環境をことごとく変革する「革命の組織」を強制しているからである。コントの新しい楽園で人びとは死なないだろう、新しいエリートの政治的無垢の生贄となつて生き続けることだけはできる。ここに、十九世紀のメシア的ヒューマニズムのまことに非人間的な形姿をまざまざと見せつけられる想いである。

マルクスにとつては、たとえば『経済学・哲学手稿』のなかで述べられているように、「歴史の全運動は、共産主義を現実的に産出する行為……である。」人間とは人間的あり方を自身の活動（Tätigkeit）によつて顕示するものだ。パリ滞在中の若きマルクスに、フランス革命後のイデオローグがおよぼした影響はきわめて大きく、彼の思想形成にもつとも重要な時期であつたことは紛れもない。だが、それがいわゆる疎外論を中心とするヒューマニズムであつたかどうか、ということはジェルミーノにとつて問題ではない。[8]問題は、人間存在を、したがつて社会的現実というものを感性的＝実践的活動以外のなにものでもない、とマルクスが思惟したことである。すべてのイデオロギー――宗教的、芸術的、形而上学的、法制的、政治

的な――は「虚偽の意識」なのだ。それゆえに、イデオロギーの「仮面を剝す」（『ドイッチェ・イデオロギー』）ことにとどまらず、実践的＝批判的活動は「いつさいの社会生活は、本質的には実践的である。……いつさいの神秘は、人間の実践のなかにその合理的解決を見いだす」（「フォイエルバッハに関するテーゼ八」）ことに始まり、そして終る。これ以上述べる必要は無い。要するにジェルミーノは、プラトンの『ポリテイヤ』に代つて、『共産党宣言』のイデオロギー的綱領をわれわれが持つていること[9]、それが政治理論の痛ましい没落であり、堕落と言うことに尽きるのだから。

(1) Hans Barth, *Wahrheit und Ideologie*, Erlenbach-Zürich und Stuttgart, Eugen Rentsch Verlag, 1961. S. 20.
(2) ラインハルト・ベンディックス「イデオロギーの時代――持続と変化――」（奈良和重訳）デーヴィッド・アプター編『イデオロギーと現代政治』慶應義塾大学地域研究クループ訳（慶応通信）三四九頁。
(3) Dante Germino, *Beyond Ideology; The Revival of Political Theory*, New York, Evanston, and London, Harper & Row, 1967, p. 56.
(4) Thomas Molnar, *The Decline of the Intellectual*, Cleveland and New York, The World Publishing Co., (Meridian Books) 1961, p. 242.
(5) *Ibid.*, p. 336.
(6) Germino, *op. cit.*, p. 56. の引用によるもの。これはC・S・ルイスの "Abolition of Man" という言葉である。
(7) *Ibid.*, p. 68.
(8) *Ibid.*, p. 57. ジェルミーノは、エーリッヒ・フロムその他の学者が初期マルクスの作品にヒューマニズム的解釈を加えているのを、「誤解」であると明確に述べている。
(9) *Ibid.*, p. 46.

二

ジェルミーノが指摘しているように、政治理論の実証主義化とイデオロギー化は、奇妙にも附きつ離れつむつみ戯れながら、「フランス革命から第二次大戦まで」のあいだ、不幸にしてヨーロッパに悪の華々を狂い咲かせた。社会主義、共産主義、ファシズム、ナチズム……至福千年王国のユートピア像を求めあぐねて。

しかしこの間に、実証主義化のプロセスは一層ソフィスティケートされた装いを凝らして、今世紀にはネオ・ポジティヴィズムとなる。二〇年代のウィーン学団を中心とする学者たちの運動がそれであり、哲学の《方法論的純化》[1]への途を開いたことは注目すべきことだつた。論理実証主義は、事実命題と価値判断とを峻別し、科学的検証の原理確立にもつぱらすべてのエネルギーを集中した。それと呼応してあらわれた学派が言語分析哲学者であつた。*Wo=von man nicht sprechen kann daüber muss man schweigen*——彼らは形而上学的命題をいつさい締めだす。哲学は日常の、感覚的経験の言語を語るというわけである。こうした知的傾向が政治思想にあたえた衝撃は、それこそ「政治のイデオロギー的基礎」を根底から覆えすものであつた。[2] 十九世紀ヨーロッパの傲岸きわまる体系構築やメシア的思想家たちによつて、知的風土が毒されたことに対する過度の反動化、これはそうしたひとつの現象として理解できる。しかし一方で、古典的政治理論の破壊をもたらしたが、みずからは創造することのない不毛性だ、との非難をこうむつてはいるものの、他方では、政治思想の脱イデオロギー化に重要な役割を果したことは否定できない。

ところで、現代においてこの実証主義的傾向をもつとも鮮明に示しているのは、言うまでもなく政治行動科学、あるいは行動主義である。じつは、ジェルミーノの批判の直接的対象も、行動主義的政治学そのものに向けられているのだ。「実証主義的政治学や社会科学に対する現代の抵抗運動」[3]というようなむきだしの敵意と反感、彼の批判のうちにはそのような情念が燃えている。もちろん彼ひとりではない。彼が取りあげる現代政治思想家たち——オークショット（Michael Oakshott）、シュトラウス（Leo Strauss）、ジュヴネル（Bertrand de Jouvenel）、アレント（Hannah Arendt）、そしてフェーゲリン（Eric Voegelin）など——は多少ともそうである。彼らはアメリカにおいて、「現代政治理論の蒼穹のなかでもつとも燦然と光輝をはなつ星群」[4]となつているのだが、揃つてみな「異邦人」であることも注目に価する。[5]

今ここでは、行動主義的政治学の発展過程を述べることが目的ではなく、反行動主義的《偏見》というものを明らかにした

いのである。行動主義者自身からも鋭い批判が出てきているときである――たとえばデーヴィド・イーストンがそれだが、彼の論文については次節で触れよう。それ程に、行動主義のいわば *tyrannus* はものすさまじい。*vindicae contra behaviorialismos* といつたような、いかにも時流に反した弁明がなされねばならない理由でもあろう。[6] 反行動主義者たちの信条には、恐らくこの言葉が刻み込まれているだろう。シュトラウスは、『政治学の科学的研究に関するエッセイ』の「エピローグ」をつぎのように比喩的に結んでいる。[7]

新しい政治学を悪魔的だと呼ばわるものはごく少数の大莫迦ものだけだろう。それは、落ちた天使にみられる特異な諸属性を持つてもいない。それはマキァヴェリ的でさえもない。マキァヴェリは優雅で、繊細であり、色彩に富んでいる。それは暴君ネロのようでもないのだ。にもかかわらず、新しい政治学について言いうることは、それはローマが燃えているのに、閑居していることだ。新しい政治学は閑居していることを自分で知らないし、またローマが燃えていることも知らない、という二つのことによつて弁解されるのだ。

しかしながら、行動主義的政治学者は「ローマが燃えていることを知らない」わけではない。ハリー・エクスタインの言うように、「その非難は、それが向けられた当の人たちにとつては肯綮にあたつていよう。私はそうだと思つていない、だがここではそれは重要ではない。本質的な問題点は、現代の政治学者の大部分は、特殊な関心とか方法論的説得にもかかわらず、世界の問題と処理、われわれの時代と状況に特有なもの、政治のなかに永遠に遍在的に起つてくるもの、それら両方に対するかかわりに、多くの時間と努力を注いでいるのだ」。[8] しかも、行動主義的政治学の生みだした多様な理論は、みずから炎のなかで燃えあがつている。シェルドン・ウォーリンがデーヴィッド・アプターを引用して、「〝もろもろの理論は燃えるためにあるものだ〟。〝さらに科学的な理論と、もつと有効な研究方法〟への途を照らすはかない門火だけを残しながら」[9] と言われようが、ともかくそれは有意味なのである。それに対して謂われなき異議を申し立てることの方がよほど狷介不覇だと思われよう。

もう一度、ジェルミーノに戻ってみよう。むろん彼は、最近のよりラディカルな行動主義を知つているわけではなく、ラスウェル（Harold D. Lasswell）、スキナー（B. F. Skinner）、サイモン（Herbert Simon）その他を取り扱つているにすぎないのだが、反行動主義的偏見を激しくほとばしらせている。彼らのごとき科学主義の《ヒューマニズム》は、いかに善意をもつていようとも、内在論的、還元主義的イデオロギーのアンティ・ヒューマニズムにほかならない。[12] 新しい世界を獲得する暴力手段を拒絶する面で、たしかにマルクス主義と異なるとはいえ、《ソフト》なメシア的全体主義の一形態であつて、ある合理的な未来図――それは「閉ざされた社会」となることだろう――のための戦略目的のみで思考しているからなのだ、と。複合的、多次元的な現実をあたかも単純な一元的なものとして論ずることは、操作的なヒュブリスのあらわれなのである。[11] 行動主義者に対して *ad hominem* な攻撃を加えることが意図ではない、と彼は断つている。だが結局は、内在的な、世俗化された、生産指向的かつ科学主義的な《俗世文化》、さらには《近代化エートス》にコミットしている政治行動理論の研究者たちすべてに、シュトラウスとともに、「ローマが燃えていることを知らない」と言いたいのだろう。そしてさらに、こう問いたいのだ――*quo vadimus?*[12]

(1) Germino, *op. cit.*, p. 70.
(2) T・D・ウェルドン『政治の論理』永井陽之助訳（紀伊国屋書店）一〇六頁。
(3) Germino, *op. cit.*, p. 149.
(4) *Ibid.*, p. 139.
(5) Sheldon Wolin, "Paradigms and Political Science," Preton King and B.C. Pasekh (ed.,) *Politics and Experience; Essays Presented to Professor Michael Oakeshott on the Occasion of His Retirement*, Cambridge, Cambridge University Press, 1968, p. 147
(6) Albert Somit and Joseph Tanehaus, *The Development of Political Science; From Burgess to Behavioralism*, Boston, Alyn and Bason, 1967. p. 180
(7) Leo Strauss, "An Epilogue", Herbert J. Storing (ed.,) *Essays on the Scientific Study of Politics*, New York, Holt, Rinehart and Winston, 1969, p. 327.

(8) Harry Eckstein, "Political Science and Public Policy," Ithiel de Sola Pool(ed.,)*Contemporary Political Science*, New York, McGraw-Hill, 1967, pp. 122-123.
(9) Sheldon Wolin, "Political Theory as a Vocation," *The American Political Science Review*, Vol. LXIII, No. 4, Dec. 1969, p. 1075. 引用符内は、David Apter, *The Politics of Modernization*, Chicago, University of Chicago Press, 1965. P.X. からのものである。
(10) Germino, *op. cit.*, p. 213.
(11) *Ibid.* p., 15.
(12) Somit and Tanehaus, *op. cit.*, p. 205.

三

政治学の行動科学化は、現在のところ「いちじるしくアメリカ的学問」傾向である。[1] そして、新しい政治学の信奉者は右翼であり、それに対する非妥協的な反対者は左翼である。新しい政治学こそ職業のなかで正統派なのであつて、「正統派の占めるべき当然の地位」は右翼の側だ、とシュトラウスはいささか冷笑的な言辞を弄する。[2]「実証主義的破壊性についての理解」[3]とはいつても、じつは行動主義への理解なのではなく、むしろそれに対する恐怖であることがしばしばであるが、数学、論理、図型、形式モデル……それらは伝統的な政治理論家にとつては現実ではなく、現実を見失わせる妄想(ギミーラ)のごとくに映るからだ。[4]

エクスタインはこう述べている。政治学の最近の発展は一層抽象的に、空虚なもののようになつてきた。政治学研究はさらに特殊化され、断片化されてきた。こういう点を除けば、いわゆる《行動主義革命》の成果そのものが、生きた政治現象からの疎隔に基づいているなどといつて、われわれが行動主義の卑劣な反対者となる必要はない。つまり、《インディケーターズ》をデータとして使用すること、行動を《シュミレート》して研究すること、知識の資料として《モデル》を構成すること、技術的な概念図式のために政治の共通言語やその意味を放棄すること、個々の人間を相関関係のなかに埋没させる

こと、あるいは、調査質問に対する応答を生きた態度として取り扱うこと、ヴィヴィドな細部が失われてしまうような一般理論を構成すること、こうしたところに問題が問われているわけなのだ。「行動主義への抵抗の幾分かは、まさにこの事実によることを感じるであろうし、われわれが炎に包まれて閑居している、とはなはだ心外な非難をこうむるのも、この理由のためである」[5]と。だが、事実は逆なのである。政治的にも学問上でも危機的状況にあつて、政治学者と政治家、社会科学と公共政策との関係について絶えず内的緊張に苦悩したマックス・ウェーバー――その彼の生涯と思想を素描しながら、エクスタインは行動主義と政治的現実とのかかわりの有意味性を探つているのである。

まさにこの点をもつともポレミックなかたちで問題化し、かつ行動主義者からの批判をも慎重に予想しつつ、《ポスト・ビヘーヴィア革命》を呼びかけているのがイーストンである。彼は、ウェーバーが政治学者と政治家との職業を区別することではまつたく不充分である、と言う。そして、「職業の政治化」(politicization of the professions) を主張し、Federation of Social Scientists という構想をあえて示す[6]。かく言う彼の胸裡には、六〇年代アメリカの危機――核戦争、内戦にまで悪化しそうな気配の人種間の分裂、ヴェトナム戦争、しかもそれらの事態は全人類の未来に対する恐怖と不安にまで深刻化されつつある――が激痛のように去来し、もはや目蓋を蔽つてはいられないのだ。しかしながら、ポスト・ビヘーヴィア革命とは移ろいゆく一現象ではなく、やがて消えゆく歴史の偶発事の類いでもない。政治学という学問の歴史における特殊な、重要なエピソードなのである。

イーストンは先ずこう書いている。「新しい革命がアメリカ政治学のなかに進行しつつある。以前の革命――行動主義――が完成されるかされないうちに、現代のつのり行く社会的・政治的危機に襲われてしまつた。こうした危機のもつ重圧は、われわれがまさにそのなかにいる新しい闘争という形態をとつて、われわれの学問内部で感じられているのだ。この新しい最近の挑戦というものは、発展しつつある行動科学的正統派に対して向けられている。この挑戦を私はポスト・ビヘーヴィ

ア革命と呼ぶだろう」[7]。

行動科学的正統派――先のシュトラウスの表現を想起してみよう――に対するポスト・ビヘーヴィア革命は、行動主義のもうひとつの反動なのではない。それは新しい方向性をもつた、ひとつの思想傾向である。政治的現実世界との有意味性と行為に関して、ポスト・行動主義者の新しい信条というべきものを要約すれば、つぎのごとくである。[8]

(一)実体が技術に先行しなければならない。つまり、調査研究の道具がソフィスティケートされることよりも、現代の直面する緊急な社会問題にとつてもつと適切であり、有意味でなくてはならない。

(二)行動科学は経験的保守主義のイデオロギーを隠蔽している。事実の記述および分析にもつぱら自己限定することは、当の事実を広範なコンテクストにおいて理解することを妨げてしまう。経験的な政治学は現状維持とならざるをえない。

(三)行動主義的研究は現実との触れ合いを失つてゆく。抽象化と分析とはあらけなき現実を隠すのに役立つ。ポスト・行動主義の課題は、行動主義的言語が必然的につくりだした沈黙の壁を破り、危機の時代における人類の真実なる必要性に政治学が手を差しのべるようにすべきだ。

(四)価値に関する探究および価値の構成的発展は、政治学研究の消しがたき部分である。科学というものは、その主張に反して、価値中立的であることは不可能だ。それゆえ、われわれの知識の限界を理解するため、その価値前提を意識する必要がある。

(五)学問にたずさわる者はすべての知識人の責任を担つている。知識人の歴史的役割は、文明の人間的価値を保護することであつたし、そうあらねばならない。この特権を放棄すれば、たんなる技術者になつてしまう。それとともに、学園における研究の自由や自治をも放棄することになる。

(六)知るということは行為の責任を担うことであつて、行為することは社会の改革に参加することなのだ。学者としての知

識人は、知識を実践する義務を負う。行為の科学（action science）とは、さまざまな理想について社会に存在する対立を省察するものである。

(七)そのような義務が知識人にあるとすれば、その職業集団――大学自体――も現代の闘争と遊離して存在することはできない。職業の政治化こそ望ましいとともに、不可避であるだろう。

ここに明らかなように、行動主義の学問研究、さらに、その成果を否定することが彼の意図では毛頭ない。重要なことは、ポスト・行動主義者がふたたびウェーバーとかマンハイムの深い思索を顧みて、「多くの人びとに知られ、文明化された人間的諸価値の守護者としての、ヒューマニズム的な知識人の概念に立ち戻る」[9]ということである。すなわち、それを思想的レヴェルで言いかえるなら、「古典的な自然法の復活を求めて、人間の科学の可能性を拒絶するような哲学は、そうすることによつて己れの機会を喪失し、理論のこのような創造的課題を引き受ける己れの適合性を疑わしくしているのだ。現代の行動科学自体の諸発見を拒否するのではなく、そのうえに構築する心構えがあり、そして、政治生活にとつての諸発見の意味内容を選択可能な、明確なる価値枠組の光のなかで沈思する心構えがある、そんな大胆な思索的理論化をわれわれは要求している」[10]。以上のようにして、イーストンは学問としての政治学への新しいストラテジーを展開している。

(1) Gabriel A. Almond, "Political Theory and Politicial Science," Ithiel de Sola Pool, (ed.,) *op. cit.*, p. 4.
(2) Strauss, *op. cit.*, p. 308.
(3) Eric Voegelin, *The New Science of Politics*, Chicago, University of Chicago Press, 1952, p. 4.
(4) Eugene J. Meehan, *Contemporary Political Thought; A Critical Study*, Homewood, Illinois, The Dorosey Press, 1967, p. 53.
(5) Eckstein, *op. cit.*, p. 159
(6) David Easton, "The New Revolution in Political Science," *The American Political Science Review*, Vol. LXIII No. 4. Dec. 1969, p. 1060.
(7) *Ibid.*, p. 1051.
(8) *Ibid.*, p. 1052

(9) *Ibid.*, p. 1059.
(10) *Ibid.*, p. 1058

四

vita activa の近代的意味を哲学的存在論のパースペクティヴにおいて見透す政治思想家ハンナ・アレントは、「近代の行動主義の諸理論についての困惑は、それらが悪いのではなく、真実となりえたということ、それらが実際に近代社会の幾つかの明瞭な傾向をもつともよく概念化しているということだ。近代――それは人間活動の先例のない、しかも約束された爆発なのだ――は、歴史がかつて経験したもつとも致命的な、もつとも不毛な受動性に終るかも知れない」と警告を発している。[1] *vita contemplativa* の恢復が叫ばれるゆえんである。イーストン論文の右の最後の言葉は、まさに同じ思想方向を指示している。アレントの憂慮およびイーストンの焦慮はともに重なり合つて、伝統的な反行動主義的政治学者に疼きをあたえないだろうか。彼らの懈倦――政治哲学者であれ道徳哲学者であれ、「規範的諸問題に関心を抱くことによつて生活費をかせいでいる者は、ひとしく日常生活から遠去かり、無関心なのだ。彼らの仕事の多くは、テクストのたんなる解説であり、涯しない註釈にすぎぬ」[2]といつた誹謗は別にしても、「ローマが燃えているのに、閑居している」といわれるのは一体誰なのか？

政治理論への反省、じつはそれは同じくイーストンによつて、以前に指摘されていたのである――「歴史主義への没落」として。[3] 政治思想の研究は、思想史の研究であつて、歴史的＝経験的＝論理的アプローチに終始し、価値・道徳の問題そのものを放擲してしまつている、と。政治思想家は、その点で行動科学者とまつたく同工異曲である。すなわち、「広まつている価値に対する本質的に無批判なコミットメント」[4]に陥つているのだ。さまざまな権力関係のなかで相反する価値類型

を、厳しい批判的分析と想像的再構成を行なおうとせず、受容され易いものを受容することは、怠慢というべきだろう。「政治システムのイメージを構成する積極的課題」を、イーストンは政治思想家に要請し、「構成的アプローチ」と呼ぶものを示唆したのであつた。[5]

誤解をまねかないよう附言しておくと、伝統的な政治理論家のアプローチは、いかにしても歴史的であることは当然である。たとえば、オークショットも言うように、「……われわれが理解するため学んでいる当のものは、政治的伝統というもの、具体的な行動様式なのである。そしてまさにこの理由から、学問のレヴェルでは、政治学の研究とは歴史的研究である、というのが適切である」。[6]彼の見解は充分にうなづける。あるいは、政治哲学とは何か、という問を発することが過去の哲学者たちの作品に向わせ、「哲学することの過程において、哲学者は、自己の探求の論理そのものによつて、歴史に振り向かざるを得ないと感じる」。[7]そして、思想史からわれわれの直接的な問題解決を要求するということは、確かに方法論的な誤謬であるばかりか、道徳的な過誤でもあるだろう。「過去から学ぶということは……自己意識そのものへの鍵を学ぶということである」[8]からだ。そうであればこそ、もしもわれわれがギボンのごとき文学的才能を持ちあわせていれば、思想史はドラマティックであるし、そうあるべきものとなろう。[9]あるいは、感受性――ジョージ・ケイティブの表現を借りれば、思想家が過去の偉大な思想家から感し取るものはそれ以外にない。[10]

イーストン自身が「……過去の偉大な政治理論は、好ましい政治生活の条件への探求にすぎなかつたのではない。……深い思想の、いわゆる政治理論家は、事実、労働の分業をなんら知らずに、政治生活のあらゆる側面を自由に探索したトータルな社会科学者であつた」[11]と述べているところも、同じ意味である。つまり、右のような鋭い歴史意識に支えられることなく、他方で徒らに反行動主義的偏見を抱く者は、みずからを蔑むものではないか。システムズ理論、コミュニケーション理論、構造＝機能的理論などが非政治理論であるというなら、己れこそ非政治理論家にほかならないからだ。

だが、ウォーリンは違う。行動主義――彼はとくに《方法主義》(methodism) といささか軽蔑的な意味で呼ぶが――に対する批判としては、*vita methodica* に代るに *bios theoreticos* の優位を説き、イーストン論文とあまり変らないのだが[12]、当のイーストンにも批判の筆鋒が向けられているのは皮肉だ。ともかく、《行動主義革命》を真に受けて「職業としての政治理論」を揺ぎなきものとしているのである。ウォーリンは、伝統的な政治思想家がつねにそうであるように、政治理論の伝統との袂別に憤懣やるかたない。「アメリカはデカルトの教説が少しも研究されないのに、もつともよく適用される国々のひとつである」というトクヴィルの言葉を引いて、行動主義的政治学者は、この原型的なアメリカ的体験を繰り返しているだけだ、と辛辣に言う。「偏見の排除という名のもとに培われた、この反伝統主義的偏見が、過去数十年のあいだ、《伝統的政治理論》のもつ意義を減じようとする努力となつて顕在化されてきた……」[13]と断罪する。

この偏見が教育と職業にあたえた影響というものは量り知れない。研究と分析のための技術、サンプリング、質問表、面接法、コーディング……細部にわたれば限りがない。こうした方法主義による教育の貧困化は、伝統的な政治理論、あるいは学問的想像力にとつて脅威となる。ウォーリンにはポリスとパイデイアといつたような古典的観念があるのだろうか。「貧困化された魂は、精神がいかに徹底的に経験的であろうと、貧困化された世界を見る」ことになり、遊戯、関心、矛盾の併存、多様性への驚き、事物の微妙な絡まり合いなど、これらの資質が理論化ということに不可欠である、と強調される[14]。かりにアリストテレスが最初の行動主義者であるというように読まれれば、彼の研究から得るものは何もなく、骨董趣味と言われても当然のことで、現代の行動主義者のものを読んだ方が遙かに有益である。政治理論家にとつて、自己の職業と役割が自覚化されなければならないのは、このような偏見を払つて、政治の歴史的次元の包括的な政治的理解を明確に示すことにあるわけだ。

いつの時代にあつても、政治理論は現実の危機と混乱に対応しつゝ、歴史を媒介として――行動主義者は歴史喪失である

――政治秩序を認識してきた。政治理論家の職業が現代の様相の焦眉に迫るのも、じつにそのためである。合理主義、科学主義、テクノロジーの諸原則と完全に一致するような構造的現実なるがゆえに、方法主義が勝利を飾る。しかし実際には、それが政治教育における危機なのである。過去の政治理論を保持する者、政治的体験と思想との複合作用の感覚を研ぎすまし、過去の多種多様な政治的ディレンマを新たに述べる知性の苦しみの努力について記憶をとどめている者――彼らを "epic theorist" とウォーリンは呼ぶ。政治という錯綜したドラマの叙事詩的な理解、把握、判断をそなえているという意味なのであろう。「恐らく思いあがり、ひどく気取ったように思われるが、理論化のこうした形式の異常な《雄壮さ》と、その際立った目的やスタイルに注意を喚起するために選ばれた性格づけ」[15]と、ウォーリンみずから秘かにためらいをみせているが。この叙事詩的理論家は、思想の行為によって、政治的世界全体をふたたび収斂させ、その構造や関連を新しい方法で提示することができる。彼の意図は《公共的かかわり》、めざすはつねに *res publicae* である。[16] 彼を軽佻浮薄なものと思わせているのが現代という時代なのだ。叙事詩的理論家らしく、ウォーリンは書く、「理論は、ヘーゲルが予見していたように、《説明という形態をとらねばならない。まことに今や、ミネルヴァの梟がすでに飛びたつ時代であるかに思われる」、そしてミネルヴァの梟は警告と苦痛の音をたてるものなのだ。[17] と。

(1) Hannah Arendt, *The Human Condition*, Chicago, University of Chicago Press, 1958, p. 332.
(2) Meehan, *op. cit.*, p. 420.
(3) David Easton, *The Political System; An Inquiry into the State of Political Science*, New York, Alfred A. Knopf, 1953, p. 234.
(4) *Ibid.*, p. 259.
(5) *Ibid.*, p. 231.
(6) Michael Oakshott, *Rationalism in Politics and the Other Essays*, London, Methuen, 1961, p. 130.
(7) B.C. Parekh, "The Nature of Political Philosophy," King and Parekh, (ed.), *op. cit.*, p. 180.
(8) Quentin Skinner, "Meaning and Understanding in the History of Ideas," *History and Theory*, Vol. III. No. 1. 1961, p. 53.

(9) Philip P. Wiener, "Some Problems and Methods in the History of Ideas," *Journal of History of Ideas*, Vol. XXII. No. 4. Oct-Dec. 1961, p. 536.

(10) George Kateb, *Political Theory; Its Nature and Uses*, New York, St Martin's Press, 1968, p. 91.

(11) Easton, *The Political System*, p. 313.

(12) ウォーリンのいう方法主義が専門技術化し、価値中立的な客観性の名のもとに、ノーマルな現状肯定のイデオロギーとなつているという批判は、すでにイーストン論文で指摘されたところである。また、彼の「ヴィジョンと政治的想像力」、政治哲学一般に関する見解は、*Politics and Vision; Continuity and Innovation in Western Political Thought*, London, George Allen and Unwin, 1961, Chap I. でより詳細に論じられている。

(13) Wolin, "Political Theory as a Vocation," p. 1070.

(14) *Ibid.*, p. 1073.

(15) *Ibid.*, p. 1078.

(16) *Ibid.*, pp. 1028-1079.

(17) *Ibid.*, pp. 1081 and p. 1082.

五

行動主義革命のさなかからの内在的批判として、イーストンあるいはウォーリンは、「ローマが燃えていることを知らない」のではなく、むしろ知つていて閑居しているような政治思想家に向つて、己れの *vocatio* を、「何をなすべきか」を鋭く糺していることを銘記すべきだ。新しいイデオロギーとはどんなものか、それを創造せよ、と迫つているわけではない。彼らは「学問としても職業としても、われわれが何であるか、何であろうと望んでいるかについてラディカルに考え直す」[1]ことを要求しているのであつて、ある特定の集団なりイデオロギーの所有を拒絶しているのである。その意味では、反イデオロギー的であると言つてよい。

ここで、伝統的な政治思想家が正統派であるとすれば、その異端でもある左翼グループのあいだに、「イデオロギーの終焉論争」が燃えさかつていることを付記しておこう。[2] ジェルミーノが先に述べていたように、十九世紀のイデオロギーの熱

狂と狂燥は、いまだに知識人の思想に根深く揺曳している。しかし、五〇年代を境に政治的イデオローグに反省がうながされ、[3] いわゆるリプセット＝ベル・テーゼが確立された。それが「試行され、かつ検証された保守主義者」[4] のイデオロギーを代表するのか、「イデオロギーとしてのイデオロギーの終焉」とも言われるごとく、現状維持と正当化のイデオロギーにすぎないのか、[5] 論争の焦点と分岐点に遽かに結論をくだすことは許されない。もしも終焉論者が「没価値的（*wertlos*）実証主義」、アメリカの「自己自身のナルシスト的承認」[6] に堕落していると言われるならば、行動主義者の場合と似かよって、「アンティ・イデオローグは何をしているのか」[7] と問いかけるべきであり、それこそ叙事詩的理論家に委ねられた課題ともなるだろう。ところが、終焉論者はもともと正統派の範疇に属さず、この点も重要なことなのだが、文学者や社会学者、評論家などである。今日彼らは、イデオロギーを超えて、未来のイメージに想いを馳せている。それは、けつして安易な自己放棄などではなく、人類の叙事詩的構想を描こうと試みさえしている。[8] 彼らと出逢う政治思想家は何をなすべきだろうか？

レイモン・ポランは、政治哲学は「奇妙な不信の一時期」（une période d'étrange décredit）を通過しつゝある、と言う。さまざまな領域を踏みにじられ、自己の適当な場所すらない、かつてはプラトンからモンテスキュー、アリストテレスからルソー、マキャヴェリからトクヴィル、ホッブスあるいはロックからヘーゲルあるいはマルクスにいたるまで、政治共同体の生活と意味を認識し、明析化した幾多の証人を生みだしてきたのだが。今日では、「政治哲学は失われた亡霊、ないしは無価値な暗影のかなたへと見捨てられてしまつている。それは自己の職業を放棄することから身を守り、厳密な意味での哲学として自己を肯定しつゞけねばならない。つまりそれは、政治的領域において、哲学のすべての諸機能をみずからに引き受けねばならない」と。[9]

政治哲学のイデーを担うものは誰であるか？　真に政治哲学者の名に価するのは、反行動主義者でもなく、非政治理論家でもない。ふたたびウォーリンの言葉によれば、叙事詩的理論家として己れの職業に忠実である学者であるだろう。

(一) Easton, "The New Revolution in Political Science," p. 106.

(二) たとえば、Chaim I. Waxman (ed.,) *The End of Ideology Debate*, New York, Funk & Wagnalls, 1968 を参照。

(三) ダニエル・ベル『イデオロギーの終焉』(岡田直之訳、創元社)本書の副題には、Exhaustion of Political Ideas in Fifties と附されていることは注意すべきであろう。

(四) Irving Louis Horowitz, "Another View from Our Left," Waxman (ed.), *op. cit.*, p. 180.

(五) Robert A. Harber, "The End of Ideology as Ideology; *Ibid.*, p. 205.

(六) Stephen W. Rousseas and James Farganis, "American Politics and the End of Ideology," *Ibid.*, p. 27.

(七) Daniel Bell and Henry David Aiken, "Ideology—a Debate," *Ibid.*, p. 274.

(八) ダニエル・ベル＝ヨアヒム・G・メンチュー『知識文明の構想』白井礼吉訳（ダイヤモンド社）はその好例である。

(九) Raymond Polin, "Définition et Defénse de la Philosophie Politique," Pierre Arnaud et al., *L'Idée de philosophie politique* (Annuales de Philosophie Politique, 6) Paris, Presses Universitaires de France, 1965, p. 33.